

普及項目	養殖
漁業種類等	魚類養殖漁業
対象魚種	ニジマス
対象海域	日本海南部海域

古宇郡漁協におけるトラウトサーモン養殖指導

北海道後志総合振興局

後志地区水産技術普及指導所岩内支所（坂口海渡）

【背景・目的・目標（指標）】

古宇郡漁協（以下漁協）ではホタテガイ養殖を主体にサケ定置網漁業などが営まれているが、近年海洋環境の変化や資源の減少等により、漁業経営は一段と厳しさを増してきている。そのような中、当漁協及び泊村では新たな漁業の可能性を探るため、令和3年度から泊村の盃漁港内でトラウトサーモンの養殖に取り組んでいる（図1～3）。当初の生残率は9割を超え、ブランド化にも挑戦する等順調な滑り出しを見せたが、令和6年3月には大規模なへい死が発生し当所に調査への協力依頼があった。そこで道総研と連携し、へい死要因の特定及びその対策について取り組んだ。

【普及の内容・特徴】

大量へい死が発生した3月中旬に盃漁港内でSTDと有害プランクトンセンサーによる環境調査、採水によるプランクトン分析、へい死魚の内部観察及び魚病診断を行った。漁協に対しては、へい死が落ち着くまで定期的に採水続けることを提案し、指導所が主体となり4月上旬まで検鏡を継続した。また生簀内の水質悪化を防ぐため死魚は速やかに回収し、網に付着した海藻を取り除いて海水交換を良くするよう助言した。

環境調査では水温や塩分、溶存酸素等に異常な値は確認されなかった。魚病診断の結果では疾病原因となる細菌やウイルスは検出されず病気ではない事が判明した。しかし採水サンプルの検鏡では複数の珪藻類が観測され、検体の鰓からは表面に珪藻類の付着及び粘液の過剰分泌がみられた（図6～7）。このことから今回のへい死の一因として酸素欠乏が疑われ、それに関与したと思われる珪藻類を推定することができた。

【成果・活用】

指導所で定期的に採水及び検鏡を続けたことにより珪藻類の分布状況を把握することができ、今後の対応を決める際の検討資料として活用することができた。得られた結果は迅速に漁協へ報告するとともに、再発リスクが高いことから出荷時期を見直すよう提案した（図8）。漁協からも同意が得られ時期を早める等の対策を行った結果、へい死の拡大を抑える事が出来た。また、関係機関が相互に情報共有を常に行った上で対応したことにより、担当者間の連携協力関係を一層高めることができた。

【達成度自己評価】

4 目標（指標）はほぼ達成できた（76～100%）

【その他】

現在大小4基の生簀で養殖を行っており、今後さらに規模を拡大する方向であるが事業化を目指すためには成長、生残率をいかに高めていくかが重要となる。しかし、近年は高水温による種苗への影響や残餌による港内の水質悪化等が懸念され、これらへの対策が必要となってくる。そのため当所ではSTD等による環境調査、道総研や他地区指導所からの情報収集等を引き続き行うことで各課題に柔軟に対応しながら今後も指導を継続していく。

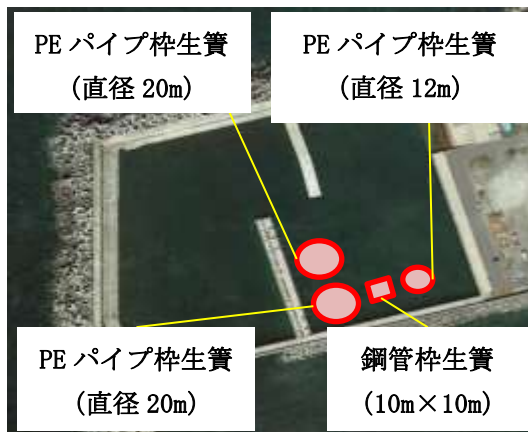


図1 養殖試験実施場所（盃漁港）



図2 出荷の様子



図3 カブトサーモン

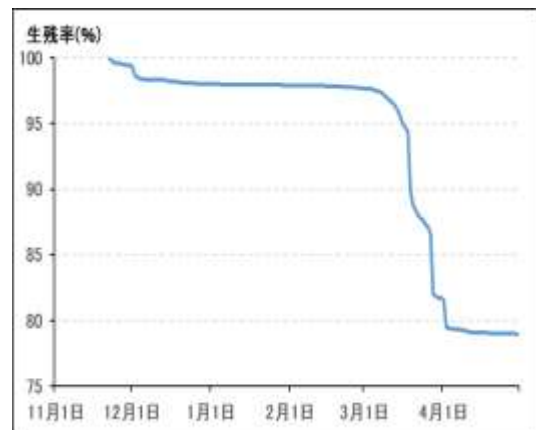


図4 養殖魚生存率の推移



図5 盃漁港内での環境測定



図6 採水サンプルの検鏡及び海水中に見られた珪藻類



図7 へい死魚の内部観察



図8 事業化に向けての検討会議